書　評

衣笠太朗　著
『旧ドイツ領全史―「国民史」において分断されてきた「境界地域」を読み解く―』
パブリブ　2020年9月　463頁　3,300円＋税

本書は，「はじめに」で定義されるごとく，「1871年から1937年までの時期にドイツ国家に属していたが，いずれかの時期にドイツ国家から分離したまま現在まで至っている領土」を対象に，「これらの地域が「いかに多様な歴史的地層から形成されているか」を明らかにし，しかしそれでもなお「なぜドイツになったのか」，そして「なぜドイツでなくなったのか」ということを一般読者に向けて解説しようとする書物である」（4頁）。こうした問いの立て方は，ある程度以上の規模を有する国家において多少なりとも成立しようが，ヨーロッパ近現代史の激流の真っ只中にあったドイツでは，この問題が国の存在証明にも大きく関わってくる。

例えば，木村靖二はその編著『ドイツ史』の冒頭において，「ドイツ史とはドイツ人の歴史なのか，ドイツという地域の歴史なのか」という疑問が，「ドイツの主体である「ドイツ人」についても，また歴史の舞台となる領域についても，歴史的に容易に確定できないある曖昧さがつきまとっていることからきている」と説明し，「ドイツ史が国民国家的一国史の枠組みからの考察になじみにくい」点に注意を促している[1)]。その曖昧さは，ドイツ国歌「ドイツ人の歌」1番で，「マース（ムーズ）川からメーメル（ネマン）川，エッシュ（アディジェ）川からベルト海峡まで」と歌われたドイツの「四至」がナチ＝ドイツの領土拡大に手を貸したとみなされ，第二次大戦後はこの1番が歌われなくなったという紆余曲折にも影を落としている[2)]。

本書の章構成は下記の通りである（地名後の○内数字は本評で用いる略号）。なお，序章の前に，カラーによる下記8地域の「歴史観光ガイド」が配されている。

序章　「旧ドイツ領」史概観
第1章　オストプロイセン①
第2章　ヴェストプロイセン②
第3章　シュレージエン③
第4章　ポーゼン④
第5章　ヒンターポンメルン⑤
第6章　北シュレースヴィヒ⑥
第7章　エルザス＝ロートリンゲン⑦
第8章　オイペン・マルメディ周辺地域⑧

「旧ドイツ領」の歴史を時系列的に略述した序章を前置きとし，第1章以下は，それぞれの地域を「ドイツ領となるまで」，「ドイツ領の中の○○」，「その後」という3節構成で説明している。各章末の「テーマ史」と「著名出身者」では，節中でふれられなかった話題が落ち穂拾い的に紹介されていて，本文を補完している。

上記の8地域は，現在では，①ロシア・ポーランド・リトアニア，②～⑤ポーランド（ただし③は一部チェコ），⑥デンマーク，⑦フランス，⑧ベルギーの領土となっている。このうち，③・⑥・⑦などについては，当該地域の領土変遷が高校世界史でも扱われるが，「はじめに」にもある通り，あくまで断片的な紹介にとどまるため，「地域が歩んだ歴史の全体像を想起すること」は難しく，本書ではその「「分断された歴史叙述」の克服」（2頁）が企図されている。ちなみに著者の専門はシュレージエン（シロンスク）史である。

ところで，すでにここまでの本評でも何度か括弧書きで併記しているように，この種の書物では，どの言語で地名を表記するかが，一つの大きな問題となってくる。やや大げさにいえば，こうした表記の問題自体が，著者の立場の表明ともなり得る。これに関して本書では，「はじめに」の次に「地名表記と地図について」という説明がおかれ，「基本的に現在の帰属国の公用語に準拠した上で，必要な範囲でドイツ語の名称も併記し」，「プロイセン国家およびドイツ国家の範疇に入った際には，ドイツ語を優先」するという原則や，表記言語を明確にするために付されるマークの凡例などが示されている（12-13頁）。このような歴史性を考慮した丁寧な対応は，一般に（もし

くは無頓着に）現行の地名表記が優先されがちな地理学においても，参考にすべき態度であろう。

本書の各章においても，境界地域の「言語問題」は随所でふれられている。例えば，「ドイツ語とスラヴ語の言語境界地域となっていたオーバーシュレージエン」（グルヌィシロンスク）では，19世紀前半時点でポーランド語が優勢であったために，プロイセン政府による行政や教育での「ドイツ語の強制」が行なわれた。その結果，社会的な上昇を求めてドイツ語の習得に取り組んだ都市労働者[3]たちの間で二言語話者が一般的になったほか，両言語が混合したクレオール語としてのヴァッサーポルニッシュ（「ひどくなまった／外国語と混ざりあったポーランド語」）も日常的に用いられていたという（③215-217頁）。ヴェストプロイセンとポーゼンでも，カトリックに対する「文化闘争」と合わせてポーランド語の排除がはかられ，「学校ストライキ」などの抗議運動をまねいた（②172-173頁，⑤273-275頁）。他方，言語面でのデンマーク化政策が推進されていたシュレースヴィヒ（スレースヴィ）では，1864年のデンマーク戦争（第二次シュレースヴィヒ戦争）を経てプロイセン治下に移ると，「デンマーク時代の政策を鏡写しするように教会，学校，行政における使用言語のドイツ化に着手」されたが，「高圧的とも言えるプロイセン側の政策」に対し，「デンマークの言語と文化を維持する対抗運動」も展開された（⑥345-347・357-358頁）。

評者はかつて，アルザス地方における言語問題の歴史と現状について報告したことがある[4]。このフランスとの境界地域については，「初等教育についてフランス語教育が導入されたのはようやく1853年になってからであり，それもフランス語で書かれた教科書をドイツ語で読解していくというスタイルのものであった」こと，そのような「フランス語による初等教育がようやく浸透していた頃」にドイツに併合（1871年）され，「フランスから派遣されていた多数の教員」が去った後に「ドイツ内地から大量の教員が補充・動員され」て「より徹底したドイツ化が推進された」ことが述べられている（⑦390・396頁）。さらに，同章末のテーマ史でも，ドーデの『最後の授業』を糸口に，「アルザスとロレーヌの言語」が取り上げられている（⑦408-409頁）。このほか，「「ヴェストプロイセン」における言語的少数派カシューブ人」のテーマ史では，ドイツ帝政期に「カシューブ語話者がドイツ人やポーランド人との接触の中で民族意識を持たざるを得なくなった」と指摘され（②187-188頁），最終章にも「ベルギーのドイツ語共同体」および「ワロン語（方言）の歴史と標準化への取り組み」のテーマ史が付されている（⑧439-441頁）。

このような境界地域における「言語問題」は，いうまでもなくそれぞれの政治的帰属の変遷と深く関わっている。本書で対象とされた8地域の場合，とりわけ近現代においては，ドイツ領となるか，その隣接国の領土となるかの二者択一の間を揺れ動いてきた。しかし，地域によっては，その地域のみの分離独立が模索されたこともある。七月革命（1830年）後のシュレースヴィヒでは，南隣のホルシュタイン地方との「一体不可分を堅持すべきとする「シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン主義者」と呼ばれる人々」があらわれ，第一次シュレースヴィヒ戦争（1848～50年）中には独立の臨時政府をもった（⑥347-351頁）が，最終的には先述の通りプロイセンに併合された。また，第一次大戦後に帰属をめぐる住民投票が実施されたオーバーシュレージエンでも，「オーバーシュレージエン自由国」を構想する分離独立運動が起こり，これが現在の「シロンスク自治運動」の淵源になっているという（③246-247頁）。同じく第一次大戦直後には，アルザス・ロレーヌにおいても，エルザス＝ロートリンゲン邦国や同共和国という「ドイツ残留やフランスへの復帰とも異なる第三の道が模索されていた」（⑦410-411頁）。こうした歴史の参照は，現在のヨーロッパにおける言語的少数派や「民族問題」を考える上でも重要な視座となろう[5]。

もっとも，境界地域がつねに分離独立をめざすとは限らず，かえって中央政府への従属を強く志向することもある。第一次大戦後，ヴェストプロイセンの「ポーランド回廊」化（②174-175頁）にともない，ヴァイマル共和国の飛地となったオストプロイセンでは，「危機的な経済状況」が「政治にも飛び火し」，「右派的・民族主義的な政党への投票」が増え，やがてそこは「ナチの票田」となって「「スラヴ人に対する防波堤」と位置づけられ」るに至った（①131-134頁）。同時期のポン

メルン（ポモージェ）でも，「プロイセンの君主主義者」が台頭するなど「内政面では非常に保守的な傾向が現れ」，1933年の選挙ではナチ党が過半数を得票して，「ドイツ全土で吹き荒れたナチ党旋風の象徴の地となった」（⑤316-319頁）。

高校世界史においてシュレージエンやアルザス・ロレーヌをめぐる係争がその地の資源と結びつけて扱われるように，「国家」にとっては境界地域の経済的価値も重要であった。とりわけドイツでは，「後発資本主義国の産業革命の典型として，国家主導の色彩がきわめて濃いのが特徴」であったし，経済面や交通面での発達は「ドイツ関税同盟」の拡大を促すとともに，それらが相まってドイツ「国民経済」構築やドイツ帝国創設の原動力ともなった[6]。19世紀前半のポンメルンでは，プロイセンの中心をなす「ブランデンブルクに隣接しているという地理的特性を生かして，従来の水運業だけでなく同世紀半ばにはポンメルンからベルリンまでの鉄道網も整備されつつあり，両地域間でのヒトやモノの移動が盛んになった」といい，ベルリン中心の鉄道路線図（1833年）にはポンメルン州都シュテティーン（シュチェチン）とを結ぶ線もえがかれている（⑤311-312頁）。また，第一次大戦後にオイペン（ユーペン）・マルメディ周辺地域がベルギーに併合された際，ドイツ帝国時代に軍事的・経済的必要から敷設された「フェン鉄道」の一部区間がドイツ領側に飛び出したために，その敷地が「線状の不思議なベルギー領」となった例も紹介されている（「鉄道が廃線となった現在までベルギー領のまま」との由である）（⑧430-431・434-435頁）。

1850年代以降，近代化の進展にともない，ドイツでは国内外への人口移動が活発になった[7]。「西部工業地帯，すなわちドルトムント，ボーフム，エッセンなどの諸都市には大規模なオストプロイセン移民街が形成され」（①127頁），こうした東部諸州からの移住者は「ルール・ポーランド人」と総称された。彼らは「「ポーランド野郎」などと差別的な名称で表象され」た結果，「徐々にポーランド民族運動へと結集していった」一方で，行政当局やドイツ民族主義者によって改姓という「ポーランド系をドイツ化するための方策」も用いられた（④287-289頁）[8]。第二次大戦中には，ナチ＝ドイツが中央および東ヨーロッパにおいて，「民族ドイツ人」の本国帰還[9]とポーランド系・ユダヤ系の立ち退きを旨とする「民族的耕地整理」[10]を実行し，逆に戦争末期以降の旧ドイツ東部領土ではドイツ系住民の避難や「追放」，さらにはそこへのポーランド系住民などの「送還」が行なわれた[11]（序章98-102頁）。こうした経緯に関しては，オストプロイセン（①135-139・142-145頁），ヴェストプロイセン（②179-185頁），シュレージエン[12]（③232-236頁），ポーゼン（④282-284頁），ヒンターポンメルン（⑤319-325頁）と，各章で詳しく語られる。戦後，占領下におかれたドイツでは，この「被追放民」の流入が大きな課題となり，社会に激しい変化をもたらすことになった[13]。そもそもこれら東部の境界地域には，ポーランド分割から第一次大戦後の「民族自決」，そして独ソ不可侵条約から東西ドイツ分断や冷戦（チャーチルの「鉄のカーテン」演説で「シュチェチンからトリエステまで」と表現された（④323・329-330頁））に至るまで，めまぐるしい変転の歴史が刻み込まれている。そのような地域の歴史をふまえたとき，1956年のポズナニ暴動（④285-286頁）や，1980年のグダニスクで始まった「連帯」運動（②185-186頁）といった統一労働者党（ポーランド共産党）への異議申し立てが「旧ドイツ領」で発生し，やがて東欧革命につながったことが決して偶然ではないと理解できよう。

評者個人としては，各章末におかれた「著名出身者」の人物紹介が興味深かった。ケーニヒスベルク（カリーニングラード）出身のカント（①150-153頁）をはじめ，ダンツィヒ（グダニスク）のショーペンハウアーおよびグラス[14]（②189-191頁），シュレージエンのハウプトマン[15]（③251頁），ポーゼン（ポズナニ）のヒンデンブルク（④293-294頁），シュテティーンのエカチェリーナ2世（⑤331-332頁），オーバーエルザス（オーラン）県のシュヴァイツァー（⑦416頁）など，これら境界地域出身の著名人は枚挙にいとまがない。ふだん彼らには「ドイツ出身の」という形容詞が無意識に付されるが，「旧ドイツ領」が多様な人材を輩出し，ドイツという「国」を彩ってきたという事実は注目に値する。換言すれば，社会的・文化的多様性に富む境界地域の人文環境こそが多士済々を育んだともいえる。土地と結びつい

た産物では，プロイセン治下のシュレージエンで発展したブンツラウ陶器が，第二次大戦後にボレスワヴィエツ陶器（ポーランド陶器）として再出発したような例もある（④244-245頁）。

全体として，約50頁に及ぶ冒頭の「歴史観光ガイド」から本文に至るまで，写真や図版が豊富に配されており，文章の理解を助けている。ただし，色の濃淡のみで示された地図が判読しにくい（およびスケールが示されていない）こと，ならびに索引に収められた地名の数が限られていることを，地理学の立場からの「ないものねだり」としてあげておく。

本評冒頭でふれたドイツ国歌歌詞に類する問題は，日本の「蛍の光」についても指摘できる[16]。近代国家成立の過程で境界地域が「周辺」に追いやられたとすれば，地域を自律的な存在として見直し，国民や領土といった概念を伸縮性あるものとして再検討する上で，本書のような歴史地誌的な試みはきわめて有益である。単なる好事家的な関心にとどまらず，より多角的な視点から本書がひもとかれることを期待したい[17]。

（三木一彦）

〔注〕

1）木村靖二編『新版　世界各国史13　ドイツ史』山川出版社，2001，2-4頁。

2）柳原初樹「ドイツ国歌第一節Deutschland über allesの訳をめぐって―ジャーナリズムへの提言―」甲南大学総合研究所叢書107，2011，41-59頁。

3）19世紀後半におけるオーバーシュレージエンは，ルール地域と並ぶ「ドイツ有数の一大工業地帯へと変貌」していた。

4）三木一彦「アルザス地方の言語問題－地域言語の展開と現状－」（手塚　章・呉羽正昭編『ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ』二宮書店，2008），59-73頁。

5）EU統合の進展とともに，地域や州による権力行使が国の権限を弱めたり，国境を越えて地区を結びつける地域連合体が生まれたりする例が各地にみられる。T. G. ジョーダン＝ビチコフ，B. B. ジョーダン著，山本正三ほか訳『ヨーロッパ―文化地域の形成と構造―』二宮書店，2005，245-248頁。

6）①西川正雄ほか編『角川世界史辞典』角川書店，2001，381・636頁。なお，②阿部謹也『物語　ドイツの歴史―ドイツ的と何か―』中公新書，1998，198頁には，ドイツ関税同盟の結成に寄与した経済学者フリードリヒ・リストの「ドイツの鉄道網と関税同盟はシャム双生児である。同じ時に生まれ，共に成長し，一つの同じ目標を追求していた。つまり国家の防衛手段である」との言葉が引かれている。

7）前掲６）②，205-207頁には，「この時代に故郷を離れた生活が一般的になってきた」とある。例えば，シュレージエンの東ドイツ人はベルリンに集まったという。

8）時期は異にするが，ナチ期のシュレージエンでは，「「新たなるドイツの精神」というスローガンのもとに，スラヴ系の名前を持つ人々はドイツ名へ改称することを強要された」（③230頁）という。

9）「第二次世界大戦期の「民族ドイツ人」入植政策」として「テーマ史」でもまとめられている（④290-291頁）。

10）ナチ＝ドイツの「東部総合計画」では，「大ドイツ国」の東に「オストラント」・「ウクライナ」などの国家弁務官区がおかれ，「ゲルマン化」に沿わない人々のシベリア送りや強制労働が構想されていた。大木　毅『独ソ戦－絶滅戦争の惨禍－』岩波新書，2019，90-93頁。

11）この「人口の強制移動」を地理学で取り上げた例として，T. G. ジョーダン著，山本正三・石井英也訳『ヨーロッパ文化』二宮書店，1989，190-194頁，がある。

12）第二次大戦中のシュレージエン州にはアウシュビッツ（オシフィエンチム）も含まれていた。

13）例えば，シュレージエンのプロテスタント教徒がカトリックの住むニーダーバイエルンに流入するなど，「小都市や農村部において宗派別に形成されていた歴史的な地域共同体に終止符が打たれた」。前掲１）338-339頁。また，前掲10）225頁によれば，こうした被追放民による政治団体「被追放民同盟」は，西ドイツやドイツの政治に右バネをきかせ続け

ているという。

14）代表作『ブリキの太鼓』で20世紀前半のダンツィヒをえがいた。ギュンター・グラス著，池内　紀訳『池澤夏樹＝個人編集　世界文学全集2-12　ブリキの太鼓』河出書房新社，2010，619頁。

15）ハウプトマン著，久保　栄訳『織工』岩波文庫，1954（原著1892），131頁は，シュレージエンにおける機械破壊運動（1844年）に題を得た戯曲であり，シュレージエン「方言」による第1稿と，それを「標準語」に近づけた第2稿がある。

16）1881（明治14）年の文部省検定済「小学校唱歌」では，3番に「つくしのきはみ，陸の奥」，4番に「千島の奥も沖縄も」とある。新城俊昭『高等学校　琉球・沖縄史　新訂・増補版』東洋企画，2001，163頁。

17）版元のサイトによれば，本書はすでに3刷を重ねているという。https://publibjp.com/20201027（閲覧日2021年2月7日）。